

社会学者の著者が、主な研究テーマである沖縄について考えて書く。あるいは「沖縄について考えることについて考えて書く」。「めんどくさい、読みづらい本」だと、はじめに読者へ断りを入れる。日本と沖縄の境界線が、どう作られ、維持され、存在するのか。飛び越えながら何度でも立ち戻り、考える。

暖房のない公立図書館で寒さを訴え、しばらくして席に戻る。と職員の私物のストープが置かれている。大都市ではこうはいかない、沖縄の人は優しいね。一般的な観光客ならば、よい思

はじめての  
沖縄  
岸 政彦



## 境界線の真上で考え続ける

い出としてそれ以上は考えない。一方、著者はその小さな親切が、おそらく規則に反することを重視する。親切にするために、無意味な規則を破る。自分のルールで人に優しくする。「自治の感覚」を持つ人が沖縄にはたくさんいる。なぜなのか。

著者は沖縄がたどってきた歴史に目を向ける。戦争中の体験だけでなくその前後の生活史全体を聞き取る。そして見いだされた「社会秩序が一時的に解体した経験」が、沖縄にある自治の感覚の原点ではと考える。

めんどくさい本であるとしても「『役に立つ』本ではない」とも記されている。沖縄の時事や歴史の解説がほしいなら、確かにそつだ。ここにるのは、境界線の真上で考え続けるために必要な視座だ。(新曜社・1300円)